

あの時、ぼくの心はみにくかった。ぼくは悔しかったのだ。妹が作文コンクールで最優秀賞を受賞した。ぼくは、佳作だった。ぼくの気持ち、雨。雷を伴う激しいどしやぶり。

佳作でもすごい賞だと、先生も両親も友達も祖父母も、みんな言ってくれた。ぼくだって、実はそう思っている。でも、ぼくは負けたのだ。たった一年生の妹に。

妹だけが、表彰式に招待された。行先は東京だった。当時パリに住んでいたぼくは、なつかしの日本に行ける妹をうらやんだ。

「すしとラーメンは食べてくるなよ。」

妹だけおいしい思いをするのは不公平だと思い、わざと意地悪を言った。妹が不思議そうにうなずいた。ぼくの気もち、台風。加えて、猛吹雪。視界ゼロ。

気持ちはずっと、ジトジトもやもやし続けていた。

「お兄ちゃん、お土産何がほしい。」

隣には、鼻歌を歌いながら、お気に入りのピンクのリュックに着替えを入れている妹がいる。妹の気持ち、快晴。まるで、パリの金色の黄葉のように、妹は体中が、キラ輝いていた。そして、黄葉前線は少しずつ、ぼくの心にも南下してきたのだ。ぼくは、妹を、うらやましいながらも、だんだんと、応援してあげたくなった。ぼくの妹として失敗をしないように、賞状をもらう時の練習を子供部屋で特訓した。インタビューの練習もした。お土産は、本を六冊頼んだ。

「日向子、頑張れよ。」

口が勝手に言っていた。妹が、ありがとうとほほ笑んだ。ぼくの気持ち、梅雨明け。完全アーチのつかい虹付き。

『ひょうししょうしき、じょうずにできたよ。おにいちゃんおれんしゅうしたからね。ありがとうね。』日本にいる妹がぼくにメールを送ってくれた。体中がジーンと熱くなった。やったな日向子。父と一緒に。パソコンの前で両手でガッツポーズをした。ぼくの気持ち、晴れ。真っ青な空には、飛行機雲が一本。

次の日、小さな妹は大きなリュックを背負って、パリに帰ってきた。空港に迎えに行ったぼくは、代わりにリュックを背負ってあげた。ずっしりと重たかった。中には、着替えの代わりに、本が六冊と納豆が二パック入っていた。見送る時よりも元気に、ピョンピョン飛びつきながら語りかけてくる妹に、ぼくはこう言った。

「ありがとうは、お兄ちゃんの台詞だよ。それからさ。」

今のぼくなら素直に言える。心を込めて。

「最優秀賞おめでとう。日向子はお兄ちゃんの日本一の妹だ。」

妹のおかげで、ぼくは気づいた。ありがとうと言うことの大切さを。ありがとう、それは、相手の心に届く言葉、そして自分の心にも響く言葉。

ぼくの心の天気予報。明日も全国的に雲一つない晴天にめぐまれるでしょう。